

The People of Northeast Japan in the Annual Events of 17th Century Kyoto

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野崎, 準 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/569

京都歳時記の中の「みちのく」——「みやことみちのく」補遺二——

野 崎 準

- 一. はじめに
- 二. 京都の歳時記に見えるみちのくの影
- 三. 京都の歳時記『日次紀事』の記事から
- 四. 平安京から見たみちのくの人々
- 五. おわりに

一. はじめに

京都に移り住んで故郷の東北を振り返ると、京都の文化のあちこちに東日本を強く意識している所があると気が付いた。

古代国家形成期の日本の中枢であった飛鳥・藤原・難波の都、そして平城京までは政治・宗教・文化の多くを大陸に学び、大陸との政治交渉や戦争もふくめて国は西方、海外に向き合っていたが、奈良時代の後半から東日本の開拓に焦点が移り、長岡京・平安京は東を向いた都であったと感じた。

その東から武家が勃興し、鎌倉幕府、室町幕府の関東管領、そして江戸幕府が成立し政治の中心が徐々に東に移ってしまった後は都

やその周辺まで東日本の影がさし、民話伝説の類にまで及んでいる事は今まで数例を上げて論じてきた(註一、二)。

さて、都には多くの伝統行事があるが、その中には東北地方にゆかりのある事件、人物にかかわるものも当然ある。そこで、江戸時代の前期に京都の文人黒川道裕が編纂した『日次紀事』という京都の歳時記を中心に、都の年中行事の中の「みちのくの影」を検討してみることにした。

(註一) 野崎準「みやことみちのく」東北学院大学東北文化研究所紀要三八

(二〇〇六年)

(註二) 野崎準「みちのくの影」東北学院大学東北文化研究所紀要三九(二〇〇七年)

二. 京都の歳時記に見えるみちのくの影

『日次紀事』の記事から

江戸時代の文化は前・中期は中世以来の京・大坂の「上方」を中心とし、江戸独自の文化が主流になるのは後期からである、と言わ

れる。その文化の中心地として、また朝廷の所在地、神仏信仰の中心地として全国から訪問客が多かった京都では、江戸時代を通じて多数の名所案内の類が執筆され刊行された。大半は民間の知識人によって編まれたものであり、内容には古典の引用から通説・俗説まで交えたものであるが、近代以後は逆に江戸時代における京都の名所旧跡への人々の関心や知識を理解する上で貴重な資料となっている。

首都のように人が多く住み、全国の人々が集まる地域における年中行事をまとめた「歳時記」には、古く中国六朝時代の『荆楚歳時記』があり、日本でも『年中行事抄』などが編まれたが、江戸時代には文人の執筆した庶民のための歳時記も編纂されるようになった。京都の年中行事をまとめたのは『日次記事』が最初の労作である。

大正天皇即位を記念して大正四年より二年かけて編纂・発行された『京都叢書』という、京都の歴史・地誌に関する多数の文献を集めた一六巻の叢書があった。この書はまず昭和八年から一〇年にかけて増補され二〇巻となる。さらに昭和四二年に復刻され改訂・増補並びに地図・索引が加えられた『新修京都叢書』全二三巻として復刻され、現在でも利用できる。その十一巻、新修では第四巻に『日次記事』という文献が収められている（註三）。

本書は解題によると「ひなみきじ」と読み、江戸時代の医師で、

本格的な京都の地誌である『雍州府志』の著者、黒川道裕（一六二三—一九一）が林鷲峰・鳳岡父子、人見竹洞の跋文をのせて延宝四年（一六七六）に出版したとある。中国の歳時記、特に明の『用開広義』にならって京都の元日から大晦日まで毎日の行事を項目に分けて並べたものである。全十二巻十二冊。各月の末尾には日の干支によって移動する行事やその月の風物詩、旬の食物まで記載している。

江戸の歳時記として民俗学でもよく引用される齊藤月岑『東都歳時記』が出版されたのは天保六年（一八三三）であるから、名所案内や歳時記の執筆・出版は関西が先行していたことが分かる。

しかし『日次記事』は出版直後に発禁処分を受け、明和八年（一七七七）京都書林仲間の『禁書目録』に「日次記事」の書名が見える。これは社寺の内々での行事を書いってしまった為かと考証されている。と言っても都の伝統行事とその考証が満載の貴重な記録であったため、江戸時代を通じて写本で伝えられたという。『京都叢書』収録の原本は二組しか残っていなかった伝世の版本によるとなっている。

道祐は儒学を林羅山とその子鷲峰に学んだ縁で解題にあるように第一巻冒頭に弘文学士院林僧叟（鷲峰）の序文と人見竹洞の跋文があり、十二巻には鷲峰の子林鳳岡の跋文がある。

本文は元日から各日付を冒頭にあげ、その下に神事、公事、人事、忌日、開帳、法会などの項目別に詳細を記している。元日の宮中行事などは『荆楚歳時記』などと同じであるが、「神武天皇御忌」（三

月七日・十一日説も併記)など歴代天皇、皇族や貴族、武士、僧侶などの著名人の忌日と、その関係寺院の法要行事がかなり詳細に記されている。

歴代天皇のご命日には現在でも皇居皇靈殿で例祭が、重要な遠忌には天皇陵前でも祭事がおこなわれているのであるから、都の年中行事では外すことができなかったであろう。幕末から明治初期の神武天皇祭は三月十一日、現在は四月三日に行われている。

忌日に儒学者、医師、連歌師、仏師、画工なども出ているのは弟子筋による供養が行われていたからであろう。

数多くの祭事の数を数える余裕はなかったが、平成三年に出版された平凡社『別冊太陽・京の百祭』は『日次紀事』を紹介し、記載の祭は「千五百、数え方によっては千六百」件が記述されていると書かれている。

(註三)『新修京都叢書』第四巻黒川道祐「日次紀事」臨川堂 昭和五一年再刊本による

三、京都の歳時記『日次紀事』の記事から

以下多くの記事の中から東北関係の記事を書き抜いて行く。

(一月)

七日 坂上刈田丸忌【是田村丸之父也】(一)【は割注、以下同じ】

坂上莉田麻呂(七二八〜七八六)は征夷大将軍坂上田村麻呂の父で、奈良時代末期に政治・軍事両面で活躍、鎮守將軍にも任じられているが、東北地方では奥浄瑠璃『田村三代記』などに登場し子の田村麻呂と共に活躍する。

日次記の一月の忌日は他に一三日に源頼朝、一七日に東照大権現(徳川家康)、二二日に木曾義仲、二七日に源実朝などの東国と関係ある人物の忌日が収められている。

(二月)

四日 中納言藤原山蔭卿忌

【伊達氏之祖而摂州島上郡總持寺之本願也…(…は中略・以下同じ) 斯人員親年中始建】

割注で特記されているように伊達氏は山蔭流藤原氏の子孫である。総持寺は惣持寺とも書き、正しくは摂津国島下郡、現在の大阪府茨木市総持寺にある真言宗寺院捕陀洛山総持寺で、中納言藤原山蔭(八二四〜八八八)建立と伝えている寺である(図版一)。

山蔭は藤原冬継の子高房の子で、父子二代にわたり『長谷寺靈驗記』や『今昔物語』、民話『鉢かつき』などにも登場する。

元龜二年(一五七一)、茨木城の茨木氏を攻めた織田信長軍に焼かれ、慶長八年(一六〇三)豊臣秀吉が再建の伽藍が残るが、古い

文化財・古文書は失われたという。本尊は秘仏千手観音で、幼少時川に落ちた山蔭が亀に助けられたというので亀の上に立ち、善女童王・兩童子を従えると言う。西国八十八カ所霊場の二十二番で、巡礼者の参拝で賑わっていた。また註にあるように京都吉田山の春日神社と新長谷寺も山蔭の創立である。新長谷寺は明治の廃仏で真如堂境内に移転された。

後述するが、伊達氏は藤原氏ということで、藤原氏の禪寺となった東福寺と関係が深かったようである。

八日 法会 千本大報恩寺

【遺教経会。始今。此寺有藤原秀衡所建之堂。並能。以下略】
日至十五日。登守平教終幼少時手習之寮。

大報恩寺、通称千本釈迦堂は鎌倉時代の建築で、上京区西陣の近くにあるながら応仁の乱や江戸時代の数回の大火を奇跡的に逃れて市内最古の仏殿として知られるが、開山求法上人は藤原秀衡の孫と伝え、平泉藤原氏との関係を伝える伝説がある（註二論文に考察）。著者黒川道祐の『雍州府誌』（『京都叢書』十卷所収）の寺院門補遺にも「大報恩寺：或言、今本堂藤原秀衡が建つる所なり」と記されており、享保二年（一七一七）の『諸国年中行事』によると、今宝物館に展示されている伝・足利義満の牛車の車輪という巨大な車輪も、昔は秀衡上洛の時の牛車の車輪と伝えていたそうである（註四）。ただし『日次紀事』は本堂や手習之寮は再建されたものでは、



図版二 京都市上京区 国宝建造物 大報恩寺本堂 藤原秀衡の伝説がある



図版一 大阪府茨木市 総持寺本堂 山蔭中納言の創立した寺

とも後段に注記しており、実際本堂は鎌倉時代、秀衡没後の建築である（図版二）。

『新修京都叢書』索引には藤原秀衡関係の項目が八件もあり、東北関係者では最高である。『京羽二重』、『都名所図会』、『雍州府誌』、『京都坊目誌』などに千本釈迦堂の建立者として見える。

また東山の武家平氏ゆかりの六波羅蜜寺の地藏菩薩像について『山州名蹟誌』（沙門白慧撰・正徳元年・一七一―一刊行）は諸説の中に、「又地藏尊、佐藤秀衡ガ本尊トナツテ奥州ニ安座シ玉フ事アリ」とし、藤原秀衡の念持仏であったものが、秀衡の死後平泉に見切りをつけたのか「再ビ飛来シ玉ヘリ」都に飛び帰ってきたとしている。明治の『京都坊目誌』も六波羅蜜寺の地藏像の一つが奥州藤原氏のもので、秀衡死後泰衡により当寺へ寄進された、というやや合理的な説を紹介している。この伝説で興味があるのは平泉藤原氏を「佐藤」姓と記していることで、「伊達秀衡」「佐藤秀衡」などと記録した例の一つでもある。

いずれにせよ都における平泉の鎮守將軍藤原秀衡の人気は高い。

十八日 佐藤三郎兵衛嗣信忌

二十日 佐藤忠信夫婦忌

【東山滑谷馬町民家後園有石塔婆兩基。民間伝言佐藤忠信夫婦之塔也。思当為古徳之墓。見其石塔面所記則永仁元年二月二十日正法建之也。…今案正法又不知何人也。一説正法修驗道之山伏也】

この二人は源義経の家臣で源平争乱中文治元年屋島の戦いで討死した兄佐藤嗣（継）信、義経一行の脱出後京で鎌倉の追手と闘い自刃した弟佐藤忠信の兄弟である。江戸時代東山区常磐町にあり、現在京都国立博物館に移されている。

この永仁元年（正しくは二年。一二九四）銘の十三重石塔は『山州名蹟誌』に「佐藤継信忠信塔」として、兄弟の忠義に感動した旅僧が、

オシマズモ君ノ命ヲツギノブノ 形見ノ石ハ苔衣キテ

と詠んだ所、その夜甲冑武者の霊があらわれ

オシムトモヨモ今マデハナガラヘジ 身ヲ捨テコソ名ヲバツギノブ

と返歌をした、という伝承を記録しており、『雍州府誌』末尾の「陵墓門」には「二基塔 滑谷十三重塔、土人いわく佐藤忠信夫婦之塔也」とあり、『都名所図会』（秋里離島著・安永九年・一七八〇刊）にも「佐藤継信・忠信供養石塔婆」として記録され、「佐藤氏の兄弟は忠肝義膽の人、漢の紀信、宋の天祥（文天祥）にも劣らない義臣」とされている。

（三月）

二四日が壇ノ浦の戦いの日として安徳天皇、平清盛の妻時子（二位尼）、以下討死した平家の公達の忌日が並ぶ。東北関係者は伝説の人小野小町の忌日が一八日である。

(四月)

これは新しく始まった行事らしく『日次紀事』に記載はないが、この前後に北山の妙満寺で「鐘供養」がある。各種観光案内には四月一九日とあるが妙満寺の案内パンフレットやホームページには「毎年春」とあるのみである。

この寺に保存されている鐘は銘文によると旧紀伊国道成寺の梵鐘である。

現在の和歌山県日高郡川辺町に所在する道成寺はおなじみ安珍清姫伝説の地であり、この梵鐘は謡曲『道成寺』や歌舞伎の『娘道成寺』で、南北朝時代初期に再鑄した鐘を鐘樓にかけた時に清姫の亡霊が出るが、僧侶の祈祷で追い払われたという鐘である。これが「みちのく」とどう関係するのかと言うと、最初の伝説で大蛇に化した清姫の嫉妬の炎で焼死する僧安珍は「奥州から来た修験僧」という設定になっているからである。道成寺の案内書には重文『道成寺絵巻』の詞書に「自奥州見目能僧（おうしゅうよりのみめよきそう）」が熊野参詣の途次、とあるとしており、現代の解釈は更に脚色されて白河あたりの人とし、「阿難尊者（釈迦の高弟で美男子をもって知られた）か今業平か」という美青年だったとある（註五）。

黒川道祐は『雍州府志』寺院門の妙満寺の項で

「…方丈有古銅鐘。紀州日高郡道成寺之鐘也。鐘外面有。紀州日高郡矢田庄在 文武天皇勅願所道成寺 治鐘勸進比丘別当法眼定秀 檀那源萬寿丸並吉田源頼秀 合山諸檀越男女 大工山願道願山 小工大夫守長 延暦十四年乙亥三月十一日。之字」

と記録し、いつ寺に入ったか不明であるが、梵鐘が他の寺に移動することは希ではない、として西本願寺に広隆寺、東福寺に西寺、日蓮宗妙覚寺に相国寺の梵鐘があることを述べている。鐘銘には読み違いがあり、年号は正平十四年（一三五九）が正しい。

『山州名蹟誌』は「…紀州日高郡矢田庄文武天皇勅願導成寺鑄鐘…大工山道願、小大工夫守長 正平十四己亥三月十一日」の銘文を写し、「天正十六年に紀伊の国の人より、自宅の竹藪に鐘が埋まっているが、怪異があるので梵鐘の無い寺に寄贈したい、と申し出があり寄贈を受けた。音が悪いので改鑄しようとしたが煙が出るなど怪異があり、結局別の鐘を作らせこの鐘は保存することにした」旨、伝来の経緯を述べている。『都名所図会』の妙塔山妙満寺の解説もほぼ同じ話であるが、和歌山県道成寺の観光パンフレットには更に脚色され、「秀吉根来寺攻めの時仙石権兵衛（秀久）が陣鐘として押収し、のち妙満寺に寄進した」と解説している。

妙塔山妙満寺（図版三）は比叡山学頭日什上人が日蓮の書を読み、帰依して康応元年（一三八九）に室町六条に創建され、その後現上京区の寺町二条に移されたが、昭和四二年に左京区岩倉幡枝に移転した。妙満寺派日蓮宗の開祖となった日什もみちのく会津の人である。

釈迦・多宝如来と日蓮聖人像をまつる本堂や、松永貞徳ゆかりの「雪の庭」、旧伽藍より移転した「中川の井」の石製井戸枠などがある。梵鐘は宝物殿で拝観させていただいたが、説明板には更に「仙



図版三 京都市左京区に移転した妙満寺

石秀久が京都に凱旋した時この鐘が急に重くなり動かせなくなったが、当寺貫首日殷上人の法力で怨念をとき、寺に納められた」と追加されていた。現在でも「道成寺」関係の映画、演劇関係者が安全を祈りに参詣される由である。

謡曲『道成寺』は中世・近世の人々に知られており、『山州名跡誌』はこの鐘の由来を「謡曲に在りて世の知るところなり」としている。その謡曲でも安珍は「奥より熊野へ年詣する山伏のありけるが…」となっている。熊野修験が東北にも深く広まっていたのは知られる所であるが、なぜこの物語の被害者として奥州の修験者が出てくるのか、興味深い。

ちなみにこの物語の古い形は平安時代長久年間（一〇四〇〜四

四）に記された『大日本法華経験記』に収められている「紀伊国牟婁郡悪女」で、あらずしは「二人の沙門、年長者と若者が、熊野参詣の時牟婁郡の宿に泊まった。宿の女主人の寡婦に若い沙門が言い寄られ、逃げた所寡婦は巨大な毒蛇になって追ひ、道成寺の鐘に隠れた若い沙門を焼き殺した。のち道成寺の僧の夢枕に僧と寡婦の霊が現れて法華経による供養を頼み、無事往生した」という話であり、沙門の名も出身地もない。これは『今昔物語』の「紀国道成寺僧、写法華救蛇話」も同様で、中世の『元享釈書』に至り「釈安珍。居鞍馬寺。與一比丘詣熊野山」と僧の名前と出自が出てくる。室町時代の「道成寺縁起絵巻」が安珍の出自を奥州の人とする最初の文献の様である。本書では宿の寡婦が宿の娘になるが、「清姫」の名前は江戸時代以後の命名だという。

道成寺絵巻を使った絵解きは現在でも摸本を使って行われており、その人々によって安珍は奥州の人と宣伝されたのであろうか。道成寺には今も鐘樓の跡に安珍の塚が残っているが（図版四）、彼が東北の人と言う伝えを知る人は少ないようである（註六）。

晦日 源義経忌【於奥州衣川館自害】 武蔵坊弁慶忌

『吾妻鏡』文治五年（一一八九）五月二日に「去閏四月晦日、於民部少輔館」で奥州（義経）を誅したと奥州より飛脚が入ったと記し、『尊卑分脈』は「閏四月二十九日於平泉」衣川館を焼き、自



図版四 和歌山県日高郡川辺町 道成寺にある安珍塚

害したとある。都人に人気があった英雄がみちのくで落命した。武蔵坊弁慶も実在の人物と考えられていたのであろう。

(五月)

この月は大坂夏の陣があり、その戦死者の忌日に混じり

七日 真田左衛門信仍忌

【妙心寺蟠桃院有塔。又龍安寺大珠院修之。号大光院道白】

とある。真田信仍は、今は「信繁」が正しいとされているが大坂方の名将真田左衛門尉幸村の別名である。

妙心寺塔頭の蟠桃院は豊臣秀吉の五奉行の一人前田玄以が妙心寺七九世一亩東黙を開頭として建立、二世雲居希膺が伊達政宗の帰依を受けたので江戸時代には仙台伊達家の維持する所となった。伝・聚楽第の玄関や同地から移転したという刻印入りの敷石があり、門には伊達家の九曜紋の瓦が葺かれている。また伊達家紋入りの法具、伊達政宗公夫妻の画像なども保存されている(図版五)。



図版五 京都市北区妙心寺 蟠桃院 瓦に九曜星紋がある。門の敷石には刻字があり、聚楽第の旧石材と伝える

そこに大坂夏の陣の宿敵、道明寺で大坂方を圧倒して進撃してきた伊達政宗軍を食い止め押し返したという真田幸村の位牌があるのは何故だろうか。『増補 妙心寺史』(註七)には「(一亩東黙の)法嗣雲居が二世となり伊達政宗公の帰依する所となり、松島の瑞巖

寺に請ぜられた関係より同院第二の壇越は政宗としてゐる」と、松島瑞巖寺の伊達政宗像の写真を掲載して説明し、政宗以後の同院を「後蟠桃院」としている。また後蟠桃院の章では雲居はもと佐蔵主という武士で、大坂の陣で豊臣方として戦ったので、あわや落人狩りにかかる所を小幡景憲や一宙東黙の奔走で、希膺と名を変えて助かったという説を述べている。黒川道祐は元和九年の生まれであるから、まだ大坂の陣の記憶が残っている人々の間で育ち、このような当時としては不穏な話題にも通じていたのであろうか。

或いはこのような記述が『日次紀事』が禁書目録入りにされた原因ではないだろうか。

二三日 坂上田村丸忌 【清水寺田村堂有肖像。墓在山科栗橋野】

東北の蝦夷戦争をほぼ終結させた征夷大將軍坂上田村麻呂の命日である。山科の墓は明治以後ロシアとの北方情勢が厳しくなった時に整備されたので疑問とする説もある。清水寺は京都を代表する寺院であるが、比叡山の近くにありながら興福寺末寺であり、延暦寺やその宮寺、祇園八坂神社（観応院）と何度も争って焼亡再建を繰り返しており、田村麻呂関係の古い遺品は残っていない。

大和國長谷寺の『長谷寺靈驗記』では「桓武天皇御宇、東夷起コッテ我朝ヲ侵サントシテ常陸國マテ貴入」ったのを征夷大將軍坂上田村麻呂が長谷観音の分身が変身した草毛の名馬に乗って戦い敗走させ、戦勝記念に新長谷寺と奥州六観音を創建した、と勇ましく紹介

しているが、京都の人にとっての坂上田村麻呂は清水寺の壇越で、謡曲『田村』で伊勢参宮の難所鈴鹿峠の盜賊を清水観音の助力を受けて退治するイメージであり、武士の最高位としての征夷大將軍や、北方防衛などの象徴となるのはまだ後の時代、明治以後の大祭である平安神宮時代祭行列の最期を飾るようになってからのようである。

二四日 瑞巖寺貞山禪利忌 【仙台中納言政宗御。而京極誓願寺竹林院修之】

東北地方の戦国大名伊達政宗であるが、京都にも長期間滞在し、外様の雄藩としても知られていたので取り上げられたようである。

新京極誓願寺といえは浄土宗西山派の本山であるが、なぜここで法要が行われたのだろうか。政宗が京都に往還していた時代の誓願寺法主は軽妙洒脱な法語で知られ、「落語の祖」とも称された安楽庵策伝であり、桂離宮の智仁親王、書家としても知られた近衛信尋（応山・後陽成天皇皇子）、烏丸光広、西洞院時慶など京都の文学サロンの人々と交友し、贈答歌が残っている。鈴木裳三『安楽庵策伝ノート（註八）』には酉年（寛永一〇年・一六三三）上洛した仙台中納言政宗との贈答歌として「策伝自筆家集」に

あづまがた鄙のすまゐも花盛 さぞや都の春をおもしろ 政宗
春過てしげる青葉におもひきや 君が詞の花を見んとは 策伝
送りくる御法の華に詠（ながめ）れば これぞ安楽世界なるべし

政宗

ささげける御法の花の色よりも 猶たへなるは君が言の葉 策伝と記録されている。

鈴木氏は『貞山公治家記録』三三巻に「安楽庵教伝」と見えるのが策伝であると考証し、古田織部との関係で交際があったとしている。誓願寺竹林院は策伝が長老として隠居していた塔頭であるが、そこで政宗を偲ぶ法要があったようである。江戸時代京都寺町に広大な寺地を持っていた同寺は明治の新京極設定で小規模になり、今は「扇塚」が落語家の信仰を集めている（図版六）。



図版六 京都市上京区 誓願寺 伊達政宗の法要が行われていた

（六月）

六日 稲苗代兼載忌

【世謂連歌師法橋兼載也。於武藏国古河辺和田里卒。】

猪苗代兼載（兼載とも書く）は会津出身の連歌師で『新撰兔玖波集』の編纂にも協力した人物である。子の兼如も都で活躍し、天正十年（一五八二）の明智光秀の愛宕百韻連歌に参加し、伊達家にも連歌、和歌の師匠として出入した。兼如の子兼与は近衛信尹から古今伝授を受けている（註九）。猪苗代家は伊達家お抱えとなり、伊達政宗の会津摺上原の戦いを描いた仙台藩の創作能『摺上』にも会津と伊達家ゆかりの連歌師として登場する。

（七月）

新暦では月遅れの七月が八坂神社の祇園祭で、現在の京都は山鉾巡行をピークに七月一杯祇園祭の諸行事があるが、江戸時代は六月であった。七月は盆行事が集中する。大文字送り火は七月十六日であった。

九日 仏智禪師山叟慧雲忌

【東福寺正覚庵僧也。伊達藏人太郎政依建東昌寺慧雲為開祖。慧雲正安三年今日遷化。政依亦同年同日逝去。】

山叟慧雲は諡号仏智禪師。同日が伊達家四代当主伊達政依の命日でもある。

鎌倉時代の伊達政依が東福寺五世山叟慧雲に帰依し、伊達郡に東昌寺、光明寺、満勝寺、観音寺、光福寺を建て、奇しくも禪師と同年月同日（正安三年（一三〇一）七月九日）に死んだと『伊達正統世次考』『寛政諸家系図伝』など伊達家の記録にも政依の項に記されている。また東福寺に塔頭正覚庵を建立し慧雲を開創に迎えた
とある。

大本山東福禪寺編『東福寺誌』（註一〇）は昭和五年に編纂された編年体の寺史であるが、正応二年◎（月日不明）「奥州太守伊達政依、東福寺塔頭正覚庵を創め山叟慧雲を開山に請す（『慧山舊記』）」とあり、また『仏智禪師伝』によるとして「（慧雲は）宋よ



図版七 京都市東山区 東福寺 正覚庵
伊達政依創建

り帰朝して承天、崇福、満勝【奥州刺使伊達四世從五位下藏人太輔藤原政依、奥州伊達郡に満勝、東昌、光明、観音、興福の五方を師奥州に存すること千九百年也】等の名刹に歴住」としている。

本書には正覚庵が慶長六年に（前年の関ヶ原の戦いで焼失した）伏見城の古材で再建されたとの記事があり、また明治末期に確井小三郎が京都各町の地誌を纏め、『京都叢書』によって大正五年に出版された『京都坊目誌』には現在の正覚庵は「明治十五年隣接する正統院を合わせて正覚庵とした。元の正覚庵は北西の字正覚の地」だとある、筆塚で知られる現在の正覚庵に至るまでは種々の興廃があったようである（図版七）。

因みに『京都坊目誌』には上京区西堂町は慶長年中の「伊達正宗の邸」であったと記し、東山青蓮院の白書院も伊達政宗の寄進となっている。青蓮院は明治二六年（一八九三）に全焼しており、大阪空襲で焼失した旧国宝願泉寺書院・茶室同様に現存していれば上方に名を残すことが出来たのに残念であった。中世に上洛し黄金や名馬を権門に寄進した伊達家代々の当主にもこのようなゆかりの建築があったが、すべて消えて、政宗の他は名も伝承も残らなかった
のであろうか。

（八月）

九日 雲居和尚忌【於奥州
松島寂】

妙心寺から伊達政宗に招かれ松島瑞巖寺の住職となった雲居希膺

の命日が記録されている。蟠桃院の記事にあるように数奇な運命をたどった名僧であった。

(九月)

三日 藤原泰衡忌【秀衡之男也。或曰当月十三日】

源頼朝の平泉征伐で藤原泰衡は『吾妻鏡』文治五年(一一八九)九月六日に家臣の河田次郎が陣岡の頼朝に頸を届けたと記され、同八日条には「今月三日打取候」とある。

(十月)

二十九日 鎮守府將軍藤原秀衡忌【文治三年今日卒】

平泉の藤原秀衡を鎮守將軍として記録している。秀衡は『吾妻鏡』『玉葉』ともに十月二十九日卒としている。京都には判官最良か源義経と幼時の牛若丸に因む地名や名所があり、上京の首途八幡神社のように平泉の黄金商人金売吉次の遺跡もある。『今昔物語』の時代から陸奥は黄金の国、憧れの国であったが、後白河法皇が藤原秀衡を嘉応二年(一一七〇)鎮守府將軍に任じ(『兵範記』)、九条兼実『玉葉』に「奥州の夷狄秀平任鎮守府將軍。乱世之基也」と言われたのは関東の源頼朝を背後から牽制し、状況によっては攻撃させ

る事も考慮していたのであろう。実際木曾義仲や源義経の軍が都に向かった時には「秀衡が奥州の軍数万騎を率いて白河の関を越えた」という噂が都に流れたことは『玉葉』にも見えている。

源義経と藤原秀衡の人気が高いのは、或いは京都の人から見れば、都育ちの義経と奥州の王者秀衡がもう少し頑張れば鎌倉に武家政権の成立はなく、院政期どころか延喜・天曆の治のような理想的古代貴族社会が再来したかも知れない、という見果てぬ夢の象徴が九郎判官義経であり、鎮守府將軍秀衡だったのであろうか。

(十一月)

十二日 藤原實方忌【歌人也。長徳四年今日於奥州死】

歌人藤原實方は陸奥守在任中、長徳四年(九九八)に名取郡笠島の道祖神の前を騎馬で横切ったので神罰を受けて没したと言う伝説がある。歌枕の地東北にあこがれてそこで死んだという、都人のみちのくへの憧れを象徴する人物であった。

二十九日 安倍貞任同宗任忌

『陸奥話記』では前九年役の安倍貞任の討死は康平五年(一一〇六)九月となっており、同時に斬首され首を都に送られたのは貞任、重任、巨理経清などとされているが、安倍宗任は許されて伊予に流

され、松浦党の先祖になった、中国地方の安倍氏もその子孫であるという説もある。

奥州十二年合戦は武家の実力を都に見せると同時に、源義家と安倍貞任の戦場における和歌の応答、都に連行された宗任が貴族たちの前で「わが国の梅の花とは見れども大宮人はいかが言うらん」と詠じて舌を卷かせたなどの伝説があるように、東国武士の教養の高さを示した戦でもあった。京都と丹波の境に安倍貞任の遺骸を細分して埋めたという伝説があることは前に報告したが、源氏の宿敵の猛将と言う以上の魔性の力を期待されていたのかも知れない（註一一）。

月末の、その月内の日の干支による行事、季節の風物などをまとめた箇所「越前、越後及奥州仙台鱒鹽引」とある。鱒は「ケイ」で川魚の名前であるが、前後の意味から塩鮭であろう。京都は内陸部で鮮魚の入手が至難だったことは知られているが、奥州の海産物の記事はここだけのようである。

（十二月）は年末行事が中心で忌日自体が少ないが、東北関係の記事が一つある。

五日 乾徳院保山道祐忌

【伊達左京大夫晴宗而中
納言政宗卿之祖父也】

伊達晴宗、乾徳院は天正五年（一五七七）十二月五日に五九歳で

没した。本書に忌日が出ているのは京都のどこかの寺院に墓や供養塔があるか、位牌が安置され命日に法事が行われていた人物である。黒川道祐の本書に先立つ著作、『雍州府志』は最後に「陵墓門」の章を設けて、山城国内の天皇陵、皇族・貴族の墓、有名人の墓や供養塔の所在地を記録し、妙心寺の武田信玄・勝頼、真田信仍の塔なども詳細に調査・記述しているが、ここには伊達晴宗の塔や位牌は出てこない。

伊達晴宗と都の関係としては『寛政重修家譜』の伊達氏系図に、晴宗の弟の「康甫 大有和尚 一風軒」がいたとし、「僧となり法を広智和尚に学び東昌寺に住す。のち東福寺に移転し庵を正覚庵の側にむすびて住し一風軒と号す。のちこの庵を東昌寺のうちにうつしてこれにをる」と記しているので、あるいはこの縁で東福寺かその塔頭正覚院が晴宗の法事を行ったのだろうか。

伊達晴宗・大有康甫の父伊達植宗は陸奥国守護に任じられ、「塵芥集」の制定や京文化の導入でも知られているのであるが、都に行事はない。『性山公治家記録』には大有和尚が永禄八年（一五六五）、隠居先の伊具郡丸森城に七八歳で死んだ伊達植宗・智松院直山円入の菩提のため政宗の時代になってから東昌寺に智松院を建てたとある。また幼時の伊達政宗の師として東福寺出身の名僧、虎哉宗乙を招聘したのもこの大有康甫である。

伊達晴宗は父植宗と天文の大乱を戦った戦国大名として都にもその名が知られていたのだろうか。亀岡市の伊達輝宗夫妻の伝説（註

一一) 同様、みちのくの人にとっては気になる記事である。

以上で『日次紀事』とその周辺の東北の記事を見終えたが、この書、すなわち江戸時代初期の都の人々の都以外への関心を見ると、天皇・皇族は都の地であるから当然としても、戦国時代の地方大名の忌日は都に評判の高かった上杉謙信(三月三日)、武田信玄(四月十二日)などの他は少なく、外国人に至っては儒学、仏教関係者、例えば釈迦(仏滅・二月十五日)、孔子(四月一日)、布袋和尚(三月三日)、達磨大師(十月五日)、漢訳仏経で知られる鳩摩羅什(八月九日)などが見えるのみである。その中で東北人の記事がこれだけ見られるのは、江戸時代に至っても京都の人々は東北地方に並々ならぬ関心を抱いていたと知られる。

(註四) 操庵子「諸国年中行事」続日本随筆大成所収 二月九日条

「今の本堂は奥州の秀衡建立」「秀衡上洛の車の輪とて当寺にあり」

(註五) 和歌山県川辺町道成寺の宝物解説。および道成寺護持会「道成寺絵とき」。

福島県白河市の「安珍・清姫」を歌った念仏唄や手毬歌も紹介されている。

(註六) 道成寺関係記事の文献をまとめておく

「紀伊国牟婁郡悪女」「本朝法華験記」(大日本法華経験記) 続群書類従 第八輯 上 伝部六卷第一九四

「紀国道成寺僧、写法華救蛇話」「今昔物語」 岩波新日本古典文学大系三五 今昔物語三 平成五年

「願維十之四靈佈六 安珍」「元享釈書」巻一九 新訂増補国史大系 第三二卷 昭和一十六年版による

小松茂美「続日本の絵巻 二四桑実寺縁起・道成寺縁起」中央公論社 平成四年

なお、この銘は鋳出でなくタガネ彫りである。そのため疑問視する話もあると聞いた。

(註七) 川上孤山「増補妙心寺史」京都思文閣 昭和五十八年再刊

(註八) 鈴木裳三「安楽庵策伝ノート」東京堂 昭和四九年

(註九) 綿拔豊昭「近世前期猪苗代氏の研究」新典社研究叢書 平成一〇年

(註一〇) 大本山東福禅寺編「東福寺誌」昭和五年。昭和五四年京都思文閣再刊

再刊

(註一一) 野崎準「境界の東北人たち」東北学院大学東北文化研究所紀要四

四 平成二四年

四. 平安京から見たみちのくの人々

平安遷都から明治維新まで、文字通り千年の首都であった京都の東北とのかかわりを追ってきたが、江戸時代の歳時記にも東北への関心が見られると気が付き、その代表作である『日次紀事』を検索したところ、このような記事が見つかった。

平安時代以後の都とみちのくの関係が中世、近世にも継続していることが本書の記事とその周辺を探索することで理解できたと考えられる。

第一は征夷大將軍坂上田村麻呂である。平安遷都の大事業が「征夷と造作」だという時代の記憶は中・近世には大分薄れ、坂上田村麻呂の伝説は謡曲『田村』の主人公のように清水観音の霊験で鈴鹿

山の盗賊を退治した、あるいは清水寺の創建に力を尽くした、程度の印象しか残っていないようである。また東山の將軍塚伝説、中世武士に信仰の扱った勝軍地蔵なども結びついているようである。

平安京成立時の名将であるが、被征服地の東北でも父苅田麻呂、妻(?)の立烏帽子御前と共に怪物悪路王、悪事の高丸などと闘う幻想的な英雄になっているのであるから、長い時間の経過により物語の主人公として変容を遂げた人物と考えるべきであろうか。

第二には平泉藤原氏三代で、圧倒的に関連する名所や伝承が多いのは三代目の鎮守將軍藤原秀衡である。これは平家追討の主役を演じながら悲劇の最期を遂げた源義経とも関係し、本文で考察したように、都の理解者であり、或いは強力な武力で武家政権の成立を阻み、院政時代どころか延喜・天曆の治の夢を復活できたかも知れない、という中世以後の都の人々の見果てぬ夢を託した幻かと考えた

い。

そう考えると、第三は外様大名で徳川家を倒せる実力のある、かの秀衡の後継者とみなされたのが伊達政宗であったかも知れない。その武力が西国大名に知れ渡ったのは大坂夏の陣道明寺の合戦であり、騎馬隊数百騎は大坂方の弓鉄炮・長柄の槍の精銳を圧倒し、真田信繁(信仍・幸村)に押し返されたとは言え、真田方も被害がひどく、以後大坂方は組織的抵抗力を失った。また徳川三代將軍家光の就任に当たっては「徳川家に弓を引くものはまず伊達家が相手を

する」と演説したと伝えられたほどの実力者とされていた(註一二)。

『伊達治家記録』に名香「柴舟」入手を廻る細川忠利・宮中との関係が記されている。これは後に『翁草』に紹介されているように都人の間には「長崎に渡った名香を細川忠興(三斎)と伊達政宗が争い、細川が良い方を取った。これは後水尾天皇にも献上された。色々の異説がある」と、香木を廻り外様の雄藩と宮中を結びつけた話にされている。このような噂が流れたのも、都人の秀衡の伝説にほのかにつながるものを感じる。近世初期の東北の英雄は伊達政宗であったと考えられよう。

明治に開始された京都平安神宮の「時代祭」の先頭は戊辰戦争の山国隊行軍で、平安京の最後は奇しくも東北地方の会津藩征討であり、奥羽越列藩同盟の主、仙台藩を降伏させて北海道の五稜郭の戦いで終結した。都から見た北の果てが奥州から蝦夷地になり、同時に千年の王都であった平安京も東京遷都により都であることを終えたのである。尊王攘夷の叫ばれる中で賊軍にされる危惧を恐れず京都守護職を受任し、大政奉還と江戸開城の後最後の激戦地として敗北した会津藩主松平容保は「みちのくの英雄」の最後の人となったようである。京都では意外と人気がある。

(註一二) 野崎準「都の奥州武将」東北学院大学東北文化研究所紀要四一

平成二二年

五. おわりに

京都から東北を見る視点について、未開発のあこがれの地、黄金や毛皮など資源の宝庫、景勝の歌枕の地、武家の活躍する地、などのイメージが史書、文学書に多数みられることから都とみちのくの関係を追いかけてきた。その過程で意外と江戸時代の文献にもあこがれのみちのくのイメージが多いことに気づき、最初の京都歳時記と言われる『日次紀事』を中心に、その周辺の行事も含めて近世の都人にとってのみちのくを追及してみた。

その結果はこの時代にも古くからの伝承、祭事、法要などに東北関係者が現れ、また東北にかかわる多くの言い伝えが残っていることが明らかになった。

大半の歴史事実のように「波の洗い続ける砂浜に僅かに残された貝殻の破片」のように残ったさまざまな行事から元となったみちのく伝承を探すのは至難であったが、都と都に住む人々から見た東北のイメージの一端を知ることができたと考えている。

今回も資料探索に京都ならびに各地方の多くのご協力を頂いた。また西日本の地理にうとい筆者に探索の糸口を与え、貴重な知識をお知らせ頂いた史迹美術同友会の先学の方々、また毎度拙稿の掲載をお許し頂いた東北学院大学の各先生方にも御礼を申し上げます。

(平成二五年八月五日)